

アジア太平洋の人をつなぎ学びを育てる

ACCU news

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

特集 ユネスコ活動の未来を共創する2

2022年度アジア太平洋青少年相互理解推進プログラム BRIDGE Across Asia 国際協働学習事業6

JICA 課題別研修「ノンフォーマル教育：誰一人取り残さない学習機会」.....6

今ここで“Curriculum Designer”があなたとわかちあいたいことは何か？
い創発 (Emergence) と並進 (Mutual translation) ?7

活動メモ11

ACCU INFORMATION11

No. **417**
2023年2月号



ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 発行

特集

ユネスコ活動の未来を共創する

ユネスコ未来共創プラットフォーム事業は、ユネスコの理念を核にSDGsの実現に取り組む諸団体や多分野にわたるユネスコ活動実践の横の連携を促し、国内外へ向けた戦略的な情報発信を行うことをめざしています。ACCUでは2022年7月より本事業の事務局として、国内外の多様なステークホルダーによる「プラットフォームの共創と運営」に取り組んでいます。この事業をきっかけに、科学や文化におけるユネスコ関連プログラムの関係者との連携も深まり、プラットフォーム共創の手ごたえを徐々に感じているところです。組織外の皆さんにもその利益を還元できるよう、これからも事務局一丸となって努めてまいります。

多角的な視点からの
知見の提供

ユネスコ未来共創プラットフォーム運営協議会

学校と地域、実践と学術、官と民など多角的かつ柔軟な視点から本事業への指導及び助言を提供。委員はユネスコ活動を展開する国内団体に限らず、民間企業や市民社会、研究機関、地方自治体における行政経験者など多岐にわたります。

日本ユネスコ協会連盟

ユネスコ・アジア文化センター
(ユネスコスクールネットワーク拠点)

ユネスコ活動プラットフォーム共創ワーキンググループ

実務者レベルの交流促進とユネスコ活動当事者意識の醸成による全国ネットワークの基盤整備を目的に、2022年度新たに設置されました。潜在的な連携分野の模索や、地域実践に関する情報交換など、プラットフォーム共創を実現するための協働の場です。

次世代ユネスコ国内委員会

アジア太平洋無形文化遺産研究センター

日本ジオパークネットワーク
(ユネスコ世界ジオパーク拠点)

日本自然保護協会
(ユネスコエコパーク拠点)

ユネスコ未来共創プラットフォーム事務局

文部科学省
(日本ユネスコ国内委員会)

国外の関連組織
(ユネスコ国内委員会、NGO、研究機関)

ユネスコ
(本部、地域事務所、センター等)

情報発信

事業連携

市民社会
(NGO、NPO)

民間企業

ユース団体
(ユネスコクラブほか)

地方自治体

大学・研究機関

活動項目

- 運営協議会及びワーキンググループの開催
- 地域協働実践に関する情報収集と発信
- 国内のユネスコ・SDGs関連ユース団体に関する情報収集とニーズ調査
- 日・英ポータルサイトの運営及びコンテンツ制作
- ユネスコウィークの企画・運営
- 情報発信ツールの拡充
- 海外展開を行う草の根のユネスコ活動の公募・審査・実施



ユネスコ未来共創プラットフォームを通じた情報発信 ~今後の展望

● **ユネスコ未来共創プラットフォームポータルサイト**
2021年開設の本ポータルサイトではユネスコ並びに日本国内外のユネスコ活動に関する基礎情報のほか、関連イベントや国連制定の国際デーの案内、様々な地域実践、ユースの声など多岐にわたる情報を発信しています。国内のユネスコ関係地域・団体（例：ユネスコ協会、ユネスコスクール、世界遺産及び無形文化遺産、エコパーク、ジオパーク）を地図上に配し、広がりを見事に捉えられるマップも掲載。ご自身の活動地

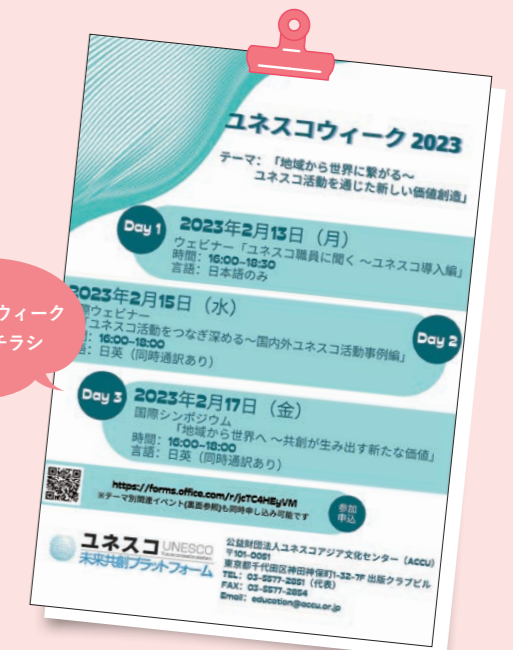
域や近隣にどのようなユネスコ関連リソースが存在するか、キーワード検索機能と併せて是非ご活用ください。今後は、ユネスコ本部発信のメッセージやイベント情報等も日本語に簡易翻訳し掲載します。また、ポータルサイト英語版の構築など国内のユネスコ活動と世界をつなぐツールの導入、運用にも注力します。

● **SNSを活用した情報発信**
ユネスコ活動の裾野を広げるためSNSも積極的に活用していきます。ユース発信の取材記事や動画、多様なステークホルダーによる対

談記事等メッセージ性の高いコンテンツを作成・SNS上で発信することで、ユネスコ活動に携わる新たな人材の取り込みや連携の「種」を蒔いていきます。

● **ユネスコウィークによる国内外の学び合い**
事務局主催イベントとしてユネスコウィークを企画します(2022年度は2月実施)。国際ウェビナー等とおして日本各地のユネスコ活動事例を海外に発信し、海外事例からも学ぶ機会を創出することで国内外の学び合いを促進します。

「ユネスコウィーク2023」チラシ



ユネスコ活動 プラットフォーム共創 ワーキンググループ

ユネスコ関連リソースを活かして全国・地域における持続発展的なネットワーク構築に取り組む「ワーキンググループ」のメンバー全6団体の皆様をご紹介します。参加の意気込み、めざすことなどを“メンバーの声”としてお寄せいただきました。



日本ユネスコ協会連盟

「ユネスコ憲章」に賛同し、草の根のユネスコ活動の連盟体として1948年に設立されたNGOです。教育による平和の普及を目指し、持続可能な社会づくりとSDGs達成に寄与すべく、途上国の識字教育支援「世界寺子屋運動」や自然災害被災地での「災害子ども教育支援」、地域文化や自然保護・継承活動を支援する「未来遺産運動」等、国内外で活動しています。

事務局長 尼子 美博

ユネスコスクール事務局 (ACCU 教育協力部内)

ACCUはアジア太平洋地域の教育・文化の相互交流を促進する中核的センターとして1971年に設立しました。ユネスコの理念に基づき学校現場で教育活動を実践する国際的ネットワーク「ユネスコスクール」の事務局運営では、加盟申請手続きから加盟後の支援(研修会や講師派遣、学校間交流マッチング、定期レビュー実施等)まで多岐にわたりサポートしています。

教育協力部 主任 藤本 早恵子

日本ジオパークネットワーク (JGN)

ジオパークは、地球科学的価値の高い地質等のある自然遺産の保護・保全、教育や防災、ジオツーリズム等により持続可能な開発をめざすユネスコの正式プログラムです。私たちは、日本ジオパークに認定されている46の正会員^{*1}、認定をめざす準会員、活動賛同者(個人・団体)のネットワークで、多様なステークホルダーの連携と活動を推進するプラットフォームです。

事務局長 古澤 加奈

自分が大切にしている文化があれば、他の人にもかけがえのない文化があるというユネスコ無形文化遺産条約を流れるmutual respectの考えを共有したいと思います。

メンバーの声

ユネスコをキーワードに、この事業をきっかけに多様な方々とつながって、国内外の様々な課題解決に少しでも寄与できればと考えております。何卒よろしくお願いいたします！

「世界ジオパークネットワーク」誕生当初はユネスコの支援を受けていたジオパークですが、2015年からユネスコの正式事業となり、今後ますます拡充していく見込みです。他のユネスコ活動とも連携し、持続可能な社会の実現をめざしていきたいです。

多くのステークホルダーとの「対話」を大切に、ユネスコ活動の輪を広げます！

このプラットフォームを活かして、学校と地域の連携を促進していきたいです。

ユネスコ活動を通して、あらゆる分野において自然への配慮がされる持続可能な社会の構築がより一層進むことを期待しています。

ユースの視点から多様なユネスコ活動の活性化に貢献したいです！

豊富な知見や新しい視点をお持ちの方々から学びつつ、私たちがこれまで実施してきたSDGs関連事業の成果を少しでも還元していければ幸いです。

全国に1,000校以上の加盟校を有するユネスコスクールは、プラットフォームの重要なアクターになると考えています。積極的にユネスコ活動を盛り上げていきたいです。

日本自然保護協会 (NACS-J)

会員の支援に支えられたNGOとして、透明性・公平性を維持し、科学的な根拠に基づく自然保護活動を行っています。特に、一度失うと二度と元には戻せないかけがえのない自然環境を守る活動、絶滅危惧種とその生息地を守る活動、自然の恵みを活かした地域づくりを進める活動、また、自然とのふれあいの機会や守り手を増やす活動に注力しています。

生物多様性保全部 主任 朱宮 丈晴

アジア太平洋無形文化遺産 研究センター (IRCI)

ユネスコの 카테고리2センター^{*2}として誕生した国立文化財機構の一組織です。主にユネスコの「無形文化遺産の保護に関する条約」の方針に沿って、アジア太平洋地域の無形文化遺産保護のための調査研究を促進し、当該分野の研究の充実を使命とする国際拠点として活動しています。

所長 岩本 渉

次世代ユネスコ国内委員会

日本のユネスコ加盟70周年に際し、国内外の次世代(10代、20代)が主体的・継続的に関わることでユネスコ活動について提言をまとめることを目的として、2021年に組織されました。現在は策定した提言実現のため、多様な関連団体と協働し、ユネスコ関連イベントへの参画や、ワークショップ実施等の活動を行っています。

沖田 広希・長澤パティ 明寿・川端 優木

ユネスコ未来共創 プラットフォームのこれから

今回の特集では、ユネスコ未来共創プラットフォームの活動内容と、事業企画と一緒に進めていただくワーキンググループメンバーをご紹介します。メンバー団体ごとにユネスコの活動分野は異なるものの、「ユネスコ」という共通点の下、今後国内外で分野横断的につながることができるようなネットワークづくりをめざしていきます。また、ユネスコ活動にこれから取り組んでいきたいと考える方々にもこの「輪」を広げていき、持続可能な社会や地域づくりに貢献していきたいと思っております。最後になりますが、特集記事作成にご協力いただいたワーキンググループメンバーの皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

2022年度アジア太平洋青少年相互理解推進プログラムBRIDGE Across Asia 国際協働学習事業

自己・他者・世界と出会う

国際教育交流部 杉戸 卓磨

8月から約1か月にわたり実施した「2022年度アジア太平洋青少年相互理解推進プログラムBRIDGE Across Asia 国際協働学習事業」に、日本を含むアジア太平洋5か国の多様なバックグラウンドを持つ高校生40名が参加しました。本プロ

ラムでは「自分と向き合う、他者を知る、世界に出会う」をコンセプトに、高校生が様々な活動を通じて自己・他者・社会への理解を深めました。メインセッションであるModel UNESCOにおいてそれぞれ各国の大使になりきり、実際のUNESCO

の国際会議を模擬し「文化遺産の保護」について議論しました。対話型ワークショップでは、各自の大切にしている価値観をテーマに対話することで、自分自身や他者について深く考えました。ユネスコの職員とキャリアについても話し合い、参加者からは「沢山の刺激をもらい、モチベーションが上がった」「多様な他者と関わる中で視野を広げ、今後も成長したい」などのコメントがありました。高校生たちのこれからの学校生活や将来の活躍が楽しみです。

DATA

実施期間：2022年8月4日(木)、5日(金)、8日(月)、9日(火)、9月11日(日)、17日(土)
参加者：高校生40名(日本、韓国、タイ、インド、モンゴル)
開催場所：オンライン、東京都



アジア太平洋5か国から個性豊かな高校生が参加

JICA 課題別研修「ノンフォーマル教育：誰一人取り残さない学習機会」

ノンフォーマルな学びの促進

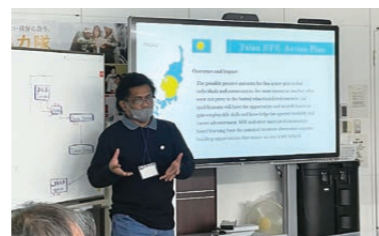
教育協力部 永里 好絵

11月29日～12月15日まで、JICA 課題別研修「ノンフォーマル教育：誰一人取り残さない学習機会」を実施しました。本研修では、各国のノンフォーマル教育の課題を明確にし、制度の改善へ向けた具体的なアクションプランを作成することを目標としました。今年度はサモア、パラオ、パキスタン、ケニアの行政官や大学等のノンフォーマル教育関係者ら9名が参加し、①ノンフォーマル教育概要、②オルタナティブな学習システム、③生涯学習と地域開発、④職業訓練とライフスキル、⑤アクション

プランの5つの単元ごとに、宮城県内で講義や視察、関係者との交流等を行いました。日本を含め参加国ごとに抱える課題は異なりますが、本研修での学びや経験を各国の文脈においてどのように活かしていくことができるか、研修員同士や日本の関係者との活発なディスカッションが行われました。プログラム最終日にはアクションプランの発表会を実施し、各国のノンフォーマル教育推進の道筋が具体的に示されました。今後どのように展開されていくか、期待が膨らみます。



気仙沼市内視察先の方々と研修員



アクションプラン発表会の様子

DATA

実施期間：2022年11月29日(火)～12月15日(木)
参加者：9名(サモア、パラオ、パキスタン、ケニア)
開催場所：宮城県(仙台市、白石市、気仙沼市、名取市、石巻市)

今ここで“Curriculum Designer”があなたとわかちあいたいことは何か？ ゝ創発(Emergence)と並進(Mutual translation)?

元東京学芸大学教授 成田 喜一郎

学問的出自は歴史学(日本近現代史)。社会科教育・国際理解教育・環境教育・シティズンシップ教育・学校図書館活用教育、ESDカリキュラムデザイン研究等を経て、専門はホリスティックな学びとケア。現在、日本ホリスティック教育/ケア学会会長、TOKYO854くもラRADIO Personality(なりっち)、創作叙事詩人(寺澤満春)。



起の章 ねらいは問いのかたちに？

本稿のタイトル「今ここで“Curriculum Designer(カリキュラム デザイナー)”があなたとわかちあいたいことは何か？」は、本稿のねらいを問いのかたちにしました。

このねらいとしての問いへの応答をめざし、書き進めると同時に、お読みになる方々にも問いをわかちあい、読み進めていっていただけるのではないかと想っています。

「今ここ」では、COVID-19 Pandemic/EmergencyからRussia-Ukraine Crisisに至るEmergency/Crisisが、全球的全人(類)的なレベルで深層からの崩壊露呈が生起している「今ここ」であり、また同時に深層からの覚醒開眼の可能性が創発(Emergence)し、生と死を分かち分岐点(Crisis)に立ちその選択肢を拡張・深化させるという意味で極めてPositiveでCriticalな見方・考え方・感じ方、在り方や成り方への可能性と共にある「今ここ」です。

“Curriculum Designer”とは、単に「教育課程/教科課程の設計者」に留まらず、全球的全人(類)的なレベルでの天地・自然、時空間・人間(じんかん)への「旅」のデザイナーです。その旅において如何なる「地図」を持つか、如何なる「旅」をめざすのか、如何なる「足跡」を残すか、そして、その道程で如何なるReflection(リフレクション)―単なる振り返りでも反省的考察でもなく、その学びや経験自体と「鏡」として、未来を見通すために過去を問い直す反射・反響・反映する行為―を行うのか、そうした「愛すべき問い(愛Q)」に回答してゆく(レスQ)ができる人が、全球的全人(類)的レベルの“Curriculum Designer”だと言えます。

わたくしは、学校や大学の勤めを終えた今ここで、“Curriculum Designer”の末席、しんがり(しんがり)に在る者として、未知-未来をたくさん持っているあなた、みなさんとわかちあいたいことがあります。「わかちあいたいこと」の「あい」には、三つのふり漢字をしたいと思います。一つは、まさに「こと」のわかち「合い」です。二つ目は、できればここかしこで出「会」たい

と思っています。そして、三つ目は、共にわかち合い、出会いを通じて、わかち「愛」を抱いていきたいと思っています。愛も如何なる時も“Love”(無得点)にならず、“Affection”のような「愛」がいいと思っています。

さて、なぜ、「ねらいを問いのかたちに」したのでしょうか。この「仮説」はアカデミックな文脈で効果検証されたことではありません。わたくしが、学校などのフィールド(実践)と大学・大学院(理論)の間に橋を架け、往き来し続けたことから、その実践知・理論知をもとに創成されてきた「仮説」に過ぎません。

わたくしが、様々なフィールドで観る・聴く・話し合う・共に在る・感じ考える・書物を紐解く・書き語り残してきたフィールドノートには「ねらいを問いのかたちに」してみた結果、様々なエピソードがありました。その主観性の高い記録をもとに、他者へ「呼びかけ」「問いかけ」してきた結果、その実践をなされ、しかも手応えを感じたり、腑に落ちたりした方々とより客観性を担保した間主観的な記録が得られました。

道標なき道(De-sign)を描き歩み、道に迷ったり、袋小路に突き当たったりしたら、Re-Designし、描き直し歩みを進めてまいりましょう。

果たしてこの問いのかたちのねらいに共に応答できるかどうか、ともかく書き進めることにします。

結の章 多様な表現としてのリフレクション？

さて、一般には起・承・転・結とあれば、まさに起に始まり、結で終わるのが常です。しかし、わたくしがわかちあいたい“Curriculum”の“Design”の方法は、起・結・転・承の順です。実際の学びや暮らし・お仕事では、起・承・転・結で展開させますが、起・結・転・承の順に書き進めます。

したがって、起の章のあとは、結の章を“Design”します。結の章では、「多様な表現としてのリフレクション？」とあり、「多様な表現」とありますが、これはいったいどういうことでしょうか。

みなさんは、多くの学習者やご自身も「リフレクション」を書かせてきたり、書かせられてきたりしたのではないのでしょうか。学校であれば「振り返りシート」に、大学などであれば「リアクションペーパー」に何かを筆記させ、筆記させられてきたのではないのでしょうか。

「リフレクション」とは、教師や教授が児童生徒や学生に書かせ、予め定められたねらいにどこまで接近できたのか否か、教師や教授が判断するためのものだけではなく、教師や教授自身の学習指導や教授行為のこれからを見通すために、これまでを問い直す機会です。児童生徒や学生が書いたリフレクションを「鏡」して、反射・反響・反映してきた事象・事実の記録を得ることです。

その際、教師・教授が定めたねらいへの遠近を測定するだけではなく、教師・教授が想定していなかった児童生徒や学生たちの問いと学びと気づきを呼び起こし引き出すには、リフレクションに不可欠な視点と方法を用意しておく必要があります。

児童生徒や学生たちが、書かされるリフレクションではなく、書きたくなるようなリフレクションを選択できるように、その表現形式を複数用意し、自己選択・自己決定できるようなリフレクションをデザインなさってみてはどうでしょう。

以下、いくつか例示してみますので、教師・教授ご自身が経験されておくとよいと思います。

- ① キーワード&解題
- ② キャッチフレーズ&解題
- ③ 漢字1字&解題
- ④ 自由詩・定型詩(短歌・俳句、狂歌・川柳など)&解題
- ⑤ イラストや図解・漫画&解題
- ⑥ 表情イラストからの選択&解題
- ⑦ 空白(白紙)&解題
- ⑧ その他、多様なArt表現(造形・絵画・楽曲・身体表現)&解題

児童生徒や学生たちは、真面目に教師・教授のねらいに沿って期待されるリフレクションを書いたり、成績を意識し点数のためにリフレクションを書いたりします。本時や単元・シラバスでその児童生徒・学生たちが自ら本音で感じ考えた学びの「果実」や「種」を表現してゆくには、視覚優位性や聴覚優位性、書く・語る言語文化の得手・不得手、非言語文化の得手・不得手を考慮し、多様な選択肢を用意しておきたいものです。

また、様々な理由で書／描けない・書／描かない・書／描きたくない児童生徒や学生たちに「離脱の自由」があることを宣言し、可能な限り心底に潜んでいる学びの「果実」や「種」を引き出すためには、「空白(白紙)」のリフレクションの有意味性を伝えておきたいものです。

そして、これらの多様な表現形式に共通しているのは、「多様な表現形式」と「解題」がセットになっている点です。

これは、学んだり経験したりした「事象・事実」に「想像力や

ひらめき」を加えて化学変化させてできた「創作構成物」をなぜ書／描いたのか、その「理由や根拠」を書いたものが「解題」です。

この「創作構成物」と「解題」との架橋・往還を「自己内対話」で行うことが重要です。

「創作構成物」はどちらかと言えば、情動を司る大脳辺縁系優位の「作品」で、「解題」は、認知機能を司る大脳新皮質系優位の「作品」だと言ってもよいでしょう。

こうした多様な表現形式のリフレクション(創作構成物+解題)は、自己内対話を通してメタ認知を促してゆくこととなります。

リフレクションの重要な視点として、「自らの学びを如何に捉えるか」というチャンスを用意しておくことです。

そして、さらに重要な視点は、「他者の学びから何を学ぶのか」というチャンスを用意することです。

とかく、これまでの「振り返り」「反省的考察」は、教師・教授に向けたものが多く、提出して終わりというケースがよく見られます。まさに、「他者の学びから何を学ぶのか」という視点を持つためには、それぞれのリフレクション(創作構成物+解題)を互いに読みあい、コメントをしあう場をデザインすることが不可欠です。(回覧コメント法)

したがって、単元やシラバスをデザインする際に、この「結」の「多様な表現としてのリフレクション」のための時間や場をデザインしておきたいものです。

リフレクション(自己との対話は、もちろん他者との対話を含む)は、学びや暮らし・仕事の後の「付け足し(option)」ではなく、「標準装備(default)」とされるべきものでしょう。

アクティブ・ラーニングが、ともすると、コンテンツベースで他者との対話(PBLなどグループワーク)ありきで展開されることが多く、リフレクションはその「付け足し」の如く、行われることになっていませんか。

表面的な活動としてのアクティブ・ラーニングがなかったとしても、二つの視点が担保されたリフレクションは、学びや暮らし・仕事の全プロセスを通じて珠玉のアクティブ・ラーニングとなるのではないのでしょうか。

「多様な表現としてのリフレクション」について、もう少し具体的に知りたい方は、「なぜ、何、どのようにリフレクションするの?」「成田喜一郎」というキーセンテンス&キーワードで検索すると、トップヒットします。そのWeb Siteからラジオ(15分12秒+20分49秒)と動画(29分52秒)へジャンプできます。動画は、中高生向けに話ししていますので、おすすめです。

転の章 コロナ的状況下に「ふったつ」概念

「結の章 多様な表現としてのリフレクション?」に向かうための重要な概念について、わかちあいたいと思っています。

その概念は、「創発(Emergence)」と「並進(Mutual translation)」です。

わたくしは、この二つの概念にコロナ的状況下で初めて出会いました。

前者「創発(Emergence)」という概念は、もともと進化論や生物学など自然科学系学問で使われていましたが、2020年春、わたくしは、コロナ的状況下のEmergency(深層からの崩壊露呈)とEmergence(新たな問いと学びと気づきの創発)の可能性のもとで、「創発(Emergence)」とは、「Reflective / Contemplative(観想的)に学び究める間個人および異質多様な場や環境との相互作用によって、新たな関係性(connection)と均衡性(balance)と包括性(inclusiveness)が発現する。また、それらによって生まれた間個人の存在と場や環境の異質多様性との間で絶えざるReflection / Contemplationを重ねながら、並進(translation)する動的過程において、過去とは異なる持続・継承可能性(sustainability)をめざす活動・機能・システムがリデザインされてゆく」(成田, 2021:3)という定義を生成しました。

しかし、その後、フランス在住民(Inhabitants)の友人・なおきさんから、この定義を一言でいうと何と云うか、もし、やまとことばにするとどうなるのか、という難問を投げかけられ、探求の日々が続きました。

そして、問いへの応答として「ふったつ」という新潟県のある地方の方言に辿り着きます。その探求の過程で柳田國男の『遠野物語』に出てくる魔物「ふったち(経立)」という言葉に出会いました。まさに、COVID-19という「ふったち」が人々に襲いかかると同時に、ここかしこで新たな問いと学びと気づきが「ふったつ」可能性と出会ってまいりました。

児童生徒・学生たちの心底・深層から新たな問いと学びと気づきが「ふったつ」珠玉のリフレクションを基調にしたCurriculum Designがなされていきました。

後者「並進(Mutual translation)」という概念は、機械工学やロボット工学で使われていた“translation”の和訳「並進」でしたが、“translation”の語源には、元来「橋渡し」「翻訳」、そして「並進」という意味が潜んでいました。

そこで、わたくしは、「並進」を「実践者と研究者、学習者(子ども)と教授者(先生)との関係性を、指導することや支援することの関係性を越えて、両者を架橋・往還させ、それぞれの言語を言い換えたり、解釈したり翻訳しながら、並び進むこと」(成田, 2021:3-4)と定義しました。その後、海外の研究史を追いかけていたとき、Ranjana Thapalyal (2018) *Education As Mutual Translation: A Yoruba and Vedantic Interface for Pedagogy in the Creative Arts*, Sense Pubという文献に出会ってから、現在では「並進(Mutual translation)」という表記をしています。

わたくしは、「並進(Mutual translation)」は、指導する・

される、支援する・されるというlinear(直線的)な関係性を越えて、実践者と研究者、学習者(子ども)と教授者(先生)などの「教育的(Educational)な関係性をリフレクションするキー概念として位置づけ、また、その概念を意味づける上で深く連関するだろう「相即性」(華嚴哲学)や「中動態」(言語学・哲学)という概念の探求を進めています。

また、様々なフィールド(学校や家庭など)で行われている「読み聞かせ」という「主一客」「主一従」の行為概念を「並進(Mutual translation)」概念のもと、おとなと子どもとの関係性においてリフレクションし、新たに「よみきき」という概念を創案し、使い始めています。

わたくしがRADIO PersonalityをしているTOKYO854くるめらの番組「なりっちの越えるまなくらタイム」には絵本や詩を紹介する「よみきき」コーナーがあり、また、stand.fmでは「よみききの世界へ」という番組を持っています。

このような新概念や造語へのこだわりは、150年前から使われ続けているEducationの訳語「教育」が誤訳だとしたり、そもそも過ちだとしたりする研究史を紐解いてゆくと、今このまま、訳語「教育」を使い続けることへの危うさを感じたからに他なりません。

Educationの語源(educatio)の周縁にあったラテン語には、母親から赤子を引き出し取り出す(educere)と乳母が赤子を養う(educare)という二つの言葉がありました。「教育」という訳語には、それらの意味は損なわれてしまっています。また、それらの言葉には“Teaching”の意味はなかったにもかかわらず、「教」という漢字が付与され、今日まで至っています。

もちろん、「教育」という言葉が明治以降の近代化や国民国家の形成に果たした役割は否定しません。しかし、善きこととして使われてきた「教育」のもたらす負の側面が学校や大学などの機関を越えて、ここかしこに日常化し始めていませんか。

日本国憲法第26条においても「教育」が一貫して教師・教授・年長者の為せる善きことで、児童生徒・学生・年少者たちは常にその善きことを「受ける権利」を有する存在です。したがってその善きことという「隠れ蓑」のもと、“Education”が、その語源の周縁にあった「educere(引き出す)」や「educare(養う)」という営みがあったことを忘れてしまったか、そもそも眼中になく“Teaching”優位の善きこととして行われてきました。

コロナ的状況下の学校や大学では、それに拍車がかかり、特に大学生たちは、その善きことをonline上で大量に与えられ、「受ける権利」の客体と化したと言っても過言ではありません。そうした状況下では、善きことをしている教師・教授は益々“Education”の語源の周縁から遠ざかっていったのではないのでしょうか。

コロナ的状況が去ったとしても、教師・教授・年長者たちは「教育」という訳語の呪縛からは逃れられず、児童生徒・学生・

年少者たちに「善きこと」を教え与え続けてゆく習性から逃れられないのではないかと危惧しています。

そこで、わたくしは、「教育」の呪縛を解くべく、損なわれたEducationの語源の周縁にあった「引き出す (educere)」「養う (educare)」営みの復権 (Rehabilitation) をめざすやさやかな書籍を刊行することにいたしました。まだ、書名は確定していませんが、『物語「教育」誤訳のままで大丈夫か?—Educationのリハビリ、あなたと試みる!—(仮)』という書籍です。

Educationのリハビリ、すなわち、問いと学びと気づきを「引き出す (educere)」「養う (Educare)」ために欠かせない概念は、この「創発 (Emergence)」と「並進 (Mutual translation)」であると言っても過言ではありません。

それでは、そのリハビリをするにはどうしたらよいか、承の章で具体的にデザインしてみましょう。

承の章 新しいCurriculum Designの試み?

新しいCurriculum Designとは何か、それがEducationの具体的なリハビリになるためには、改めて以下の3点を挙げておきたいと思います。

(1) ねらいを問いのかたちにできるか?

検証された折り紙付きの仮説ではありませんが、これまでわたしが学校や地域と大学というフィールドを架橋・往還しながら生成してきた仮説をあなたも共に検証実践していきます。

(2) 多様な表現としてのリフレクションとは何か?

結の章で述べたように、リフレクション自体をリフレクションし、多様な表現形式を自己選択・自己決定できる機会と二つの視点(自己との対話と他者との対話)を大切に、試

みてみませんか。させる/させられるリフレクションではなく、自らしたくなる動機を引き出し養う試みとして、教師・教授・年長者も児童生徒・学生・年少者たちと「並進 (Mutual translation)」しながら試みることをお忘れにならないください。

(3) Curriculumは逆向きにデザインできるか?

実際の本時や単元の学び、暮らしや仕事では、起・承・転・結のサイクルで展開するとしても、デザインをする時は、本稿のように起・結・転・承でなさってみてください。

道標なき道を描き歩むデザイン本来の意味を忘れず、道に迷ったり袋小路に突き当たったりしたときは、リデザイン (Redesign) する勇気と判断を大切にしてください。

学びや暮らし・仕事において、新しいCurriculum Designを試みるためのシート「e-カリキュラムデザイン曼荼羅」(図)を開発いたしましたので、ご活用いただけるとありがたいです。

そして、明日のご実践の“Curriculum Design”に援用なさってみてください。

もちろん、「空白 (白紙)」にも意味があります。あなたには「離脱の自由」があります。

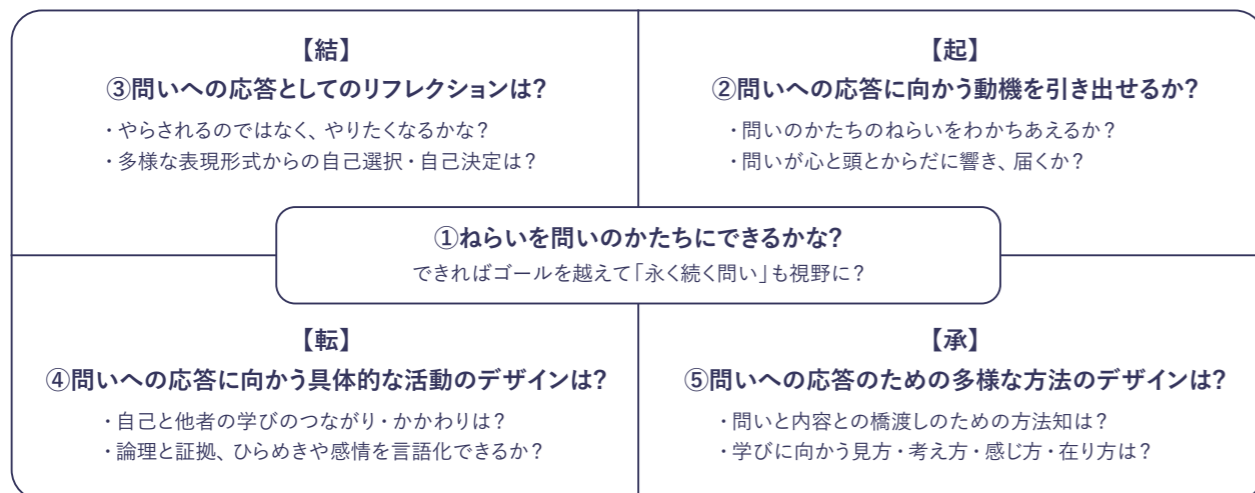
しかし、「試した時点で大成功！」(イトコサガシの冠地情さんの言葉)をあなたにお贈りして「筆」を置かせていただきます。

追伸

拙著成田 (2023) では、Educationの新訳を「涵養成る/化育成ること」としています。その理由や根拠など「解題」は追って著書やWeb Siteでお知らせしていきます。なお、本稿に関する参考文献や資料・Web Siteは、次のQRコードから「旅」ができます。



「e-カリキュラムデザイン曼荼羅:小文字のeの字を描くように、①から⑤の順番に学び(や暮らし・仕事)のデザインをしてみませんか?



中野民夫創案・三田地真実考案「プログラムデザインマンダラ(図)」を新しい Curriculum Designの理論や哲学をもとに作成した学びと暮らし・仕事のデザインシートです。(成田喜一郎)

図「e-カリキュラムデザイン曼荼羅」の描き方

世界遺産教室

①10/5(水)②ACCU奈良③奈良商工・奈良朱雀高校④32名

第2回ユネスコスクールオンライン意見交換会

①10/14(金)②ACCU③オンライン④約15名

ESD評価手法開発事業 第3回研究会

①10/17(月)②ACCU③オンライン④約15名

文化遺産ワークショップ「博物館業務におけるデジタル技術の活用」

①10/17(月)~28(金)②ACCU奈良、文化庁、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、カザフスタン共和国マルグラン記念考古学研究所③オンライン④カザフスタン15名、日本6名

ESD評価手法開発事業 第1回児童生徒評価分科会

①10/23(日)②ACCU③オンライン④5名

ASPUnivNet第2回運営委員会

①10/28(金)②ACCU③オンライン④9名

世界遺産教室

①10/28(金)②ACCU奈良③奈良県立大学附属高校④17名

インド教職員招へいプログラム

①11/6(日)、17(木)、21(月)、22(火)、27(日)②文部科学省、ACCU③オンライン、東京都④インド15名、日本15名

文化遺産の保護に資する研修(個別テーマ研修)「考古遺跡における三次元記録法」

①11/10(木)~25(金) ②ACCU奈良、文化庁、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所③オンライン④ベトナム10名、日本3名

ユネスコ未来共創プラットフォーム事業 第1回運営協議会

①11/14(月)②ACCU③オンライン④17名

第3回ユネスコスクールオンライン意見交換会

①11/16(水)②ACCU③オンライン④約15名

令和4年度ユネスコスクール年次活動調査ワーキンググループ会合

①11/18(金)②ACCU③オンライン④8名

タイ教職員招へいプログラム

①11/26(土)、30(水)、12/9(金)、19(月)、23(金)、26(月)、1/9(月)、20(金)②文部科学省、ACCU③オンライン、東京都④タイ15名、日本10名

ESD評価手法開発事業 第2回児童生徒評価分科会

①11/27(日)②ACCU③オンライン④6名

JICA 課題別研修「ノンフォーマル教育:誰一人取り残さない学習機会」

①11/29(火)~12/15(木)②ACCU③宮城県④9名(ケニア、サモア、パキスタン、パラオ)及び日本の関係者

中国教職員招へいプログラム(中国とのオンライン交流)

①12/6(火)、8(木)、11(日)、14(水)、21(水)②文部科学省、ACCU③オンライン④25名

ESD推進ネットワーク全国フォーラム2022(登壇/ポスター出展)

①12/10(土)②ESD活動支援センター、文部科学省、環境省③東京都、オンライン④外部主催につき未集計

文化遺産に関わる国際会議「アジア太平洋地域における文化財防災の現状と課題(II)—災害後の復旧・復興の事例と課題—」

①12/14(水)~22(木) ②ACCU奈良、文化庁、ICCROM、独立行政法人国立文化財機構文化財防

災センター③奈良県、オンライン④8か国13名、オブザーバー31か国211名

ASPUnivNet第2回連絡会議

①12/16(金)②ACCU③東京都、オンライン④約45名

ESD評価手法開発事業 第3回児童生徒評価分科会

①12/18(日)②ACCU③オンライン④6名

第4回ユネスコスクールオンライン意見交換会

①12/19(月)②ACCU③オンライン④約20名

ユネスコ未来共創プラットフォーム事業 第2回ワーキンググループ会合

①12/19(月)、22(木)②ACCU③オンライン、ACCU④11名

ESD評価手法開発事業 第4回研究会

①12/26(月)②ACCU③東京都、オンライン④約20名

韓国教職員招へいプログラム(対面)

①1/10(火)~15(日)②文部科学省、ACCU③静岡県、神奈川県、東京都④12名

第14回ユネスコスクール全国大会/ESD研究大会(ブース出展)

①1/22(日)②文部科学省、日本ユネスコ国内委員会③渋谷教育学園渋谷高等学校、オンライン④外部主催につき未集計

インクルーシブな地域づくり推進事業 地域会合

①1/24(火)~26(木)②ACCU③カンボジア(プノンペン)④約20名(カンボジア、日本、フィリピン)

文化遺産セミナー「高松塚古墳と東アジアの交流—調査研究の最前線から—」

①1/29(日)②ACCU奈良③なら歴史芸術文化村、オンライン④190名

ACCU INFORMATION

スロベニア&ドイツ出張報告

2022年9月、岡山大学とルブリャーナ大学(スロベニア)共催による高等教育機関におけるESD推進をテーマとした合同セミナーに参加しました。ESDの教師教育において豊富な実績をもつ両大学の研究事例や学生さんの発表など、大変勉強になりました。また、同国のユネスコスクールも訪問できました。スロベニア渡航前には、ACCUも協力してきた岡山大学の気候変動教育に関する事業の関係でドイツに同行させていただきました。ESDや気候変動を扱う大学などの関係機関を訪問し、今後の連携について意見交換が行われる中、教師教育に関する大学/機関間の協力にACCUとしてどのように実践者をつなぐ役割を果たせるか、考える機会となりました。



ドイツ・ハンブルク大学にて

©Prof. Dr. Sandra Sprenger